

延吉・くそ死ぬものか！

東京都 山崎 辦

一 陸軍特別幹部候補生

昭和十九（一九四四）年二月、陸軍は当時十五歳から十八歳までの中学生を対象に陸軍特別幹部候補生を募集した。当時、私は十八歳で、三田の慶応大学講堂で受験し、合格した。四月に浜松中部百三十部隊に入隊、花の特幹一期生となった。浜松では朝から晩まで「トトツーツ、ツーツトト」と、無線の勉強ばかりだった。

八月には一期の検閲が終わりいよいよ出陣となり、真夜中の浜松駅を軍用列車は静かに動き出した。荒れる夜の玄界灘をジグザグに進む輸送船、明け方釜山港に上陸し、再び軍用列車で朝鮮半島を北上、京城（ソウル）、平壤、新義州、山海関を経て一路北京へ向かい、北京南苑飛行場隼五十一対空無線隊に着任した。

翌二十年一月、石家荘第一航空軍教育隊から敗戦一カ月前の七月十四日に北朝鮮平壤飛行場の隼五十六対空無線隊に転属、ここで運命の八月十五日を迎えた。

八月十五日は、朝から蒸し暑かった。無線機を持つている部隊なのに、「正午、ラジオの前に集まれ」との不思議な命令が出た。兵たちを集めてラジオの前に整列。正午になると雑音と意味不明な言葉が流れてきた。何を言っているのか内容は聞き取れなかったが、日本が負けたらしい、無条件降伏をしたらしい、ということを知った。一体どうなるのだ。「展開中の分隊は直ちに本隊に帰還すべし」との命令が届き、我が杉浦分隊も無線機を撤収して、平壤市内の本隊に帰った。

八月二十六日になると、早くもソ連軍先発隊が平壤に到着した。無線機を破壊し、部隊は自らの手で武装解除を行い、ただの男の集団と化した。そして「すべての日本兵は九月三日までに平壤郊外三合理に集結せよ」との命令が出た。

九月一日、私の分隊は最初のトラックで三合理に向かった。三合理への街道は、日本兵の列が延々と続いていた。人波の中を進むトラックは、兵士の大集団に阻まれて止まった。集団の先の広々とした丘に有刺鉄線が張り巡らされ、その中にはテントが見えた。そのテントには入り口が二つあり、

ソ連兵が数人、自動小銃を構えていて、将校と兵士は別々の入り口から中へ入れられる。不吉な予感が脳裏を走って、なぜか入る気がしない。私を乗せてきたトラックは次の兵士を迎えに行くために引き返そうとしていた。私はとっさに「忘れ物！忘れ物だ！」と叫び、トラックに飛び乗りそのまま本隊に帰った。「なぜ帰って来たのか」と詰問されると思っていたのに、誰からも声がかからなかった。

杉浦分隊は全員三合理テントに入って、空っぽの部屋で私一人の生活が始まる。既に炊事班はなく、食事は自分で飯盒飯を炊かなければならなかった。

九月二日、ソ連軍にトラックが取り上げられ、同期の寺田兵長、青木兵長の分隊は歩いて出発した。九月三日、今日が最後の日だ。越智隊長以下残った兵士全員が出発した。衣類、食糧など山のように背負い込み強力のような格好で、行軍の序列も何もあったものではない。道路いっぱいに広がり、よたよたと無秩序な難民の移動行進である。まさに敗走そのものであった。十歩歩いては立ち止まり、五歩歩いては立ち止まり、最後は土手に腰をおろし座り込んだ。「逃げる、逃げる、ここは日本だ。朝鮮には多くの日本人がいる。歩いても家に帰れる、逃げる」誰かが私の胸の中で叫んでいる。

辺りがだんだんと暗くなってきた。隊長以下みんな行ってしまった。もう周りには誰もいない。重い腰を上げ暗い道をトボトボと今来た道を歩き、航空廠住宅に引き返した。誰もいない暗い部屋で、一人淋しく寝込んでしまった。

二 平壤へ逃げる

日本軍の去った航空廠社宅では、何度かソ連兵の略奪に遭う。トラックで乗りつけて来たソ連兵は、社宅の周囲に見張りを立て、日本人の逃げ出すのを防いでから各家を襲った。私の部屋にも赤鬼のような大男が侵入してきて、私の額に拳銃を突きつけ「ヤボンスキー・マダム・ダバイ（女を出せ）」とどなっていた。表では、助けを求める女性の悲鳴が聞こえる。恐くて体が震えるのではない。怖くて涙があふれるのではない。頭の中では丸太棒を振り回し、何人もの露助を叩き殺しているのだが、しかし現実は何もできない。泣き叫ぶ女性たちは無理やりトラックに引きずり上げられ、いずれかに連れ去られ二度と社宅には帰って来なかった。

社宅の床下には大量の米俵、砂糖、味噌、乾パンなどが隠してあった。食べるには当分困らないが、いつまでもここに居るわけにはいかない。

電車通りを越えて家並みに様子を見に入ると、

しかし平穏な日々であった。

ある日、突然、ソ連軍将校と朝鮮義勇軍兵士五、六人が乱入してきた。「オマエ、オヤジカ？」と尋問された。確かに童顔の少年兵士では主人には見えないだろう。とっさに「弟だ！」と言って赤ん坊と姉？を背にかばい、彼らの略奪を見守っていた。彼らは家中を荒らすだけ荒らし、めぼしいものを手にして「コノイエヲ、セツシユウスル。キョウジユウニデロ」と捨て台詞を残して出ていった。この付近には日本人住宅は少なく、良い家は全て接収されてしまい、追い出された人々は、薄汚い長屋に数家族が一緒に住むようになった。

家もろともすべてを接収されたので、哀れな親子を連れて長屋に移動した。結局、私がいても何の力にもならなかった。負けた国の男なんて、戦勝国の兵士にかかつては手も足も出ないのだ。出せるのは、ただ悔し涙のみであった。若い奥さんと一つ部屋で生活することもできないので、私は日本人の多い平壤市内に行こうと考えた。

いきなり「兵隊さん！ 兵隊さん！」と呼び止められた。そこには赤ん坊を抱いた若い女の人がいた。私は、航空隊の第一種作業衣である真っ白な服を着ていたもので、軍服には見えないだろうと思っていたのに、この人はひと目で兵隊と見破った。「その服では兵隊さんとすぐ分かりますよ、主人の服をあげますからお上がりなさい」と、笑って声を掛けてくれた。誘われるまま玄関を入り、奥の部屋に案内されたが、そこには仏壇があり軍服姿の写真が飾ってある。その人は、箆笥から下着と背広を出してくれた。久しぶりに着る民間服、なぜかぎこちなかった。

その人は「赤ん坊と二人きりです。一緒にいて下さい」と言った。負けた国の兵士でも、男なら頼りになると思っているらしい。私には何ができるか分からないが、いったん航空廠社宅に引き返し、米と砂糖を持ってお世話になることにした。

赤ん坊と若奥さんとの生活は、時が時だけにあまり話題もなく、堅苦しい時間が過ぎていったが

よれよれの帽子を深くかぶり、大蒜を嚙りながら、当時既に日本人乗車禁止になっていた電車に飛び乗る。大同橋が見えてきた。橋のたもとにはソ連兵の看視兵が見えた。

電車は揺れながら橋を渡り終えた。しっかり握りしめていて少々汗ばんだ小銭を渡して飛び降り、走って南山町の村上宅に逃げ込んだ。

この年の七月に、北京から平壤までの列車で一緒にになった母と子供四人の家族で、それ以来外出のたびに遊びに寄った家だ。玄関の戸を開けると、「あっ！ お兄ちゃんだ」「きつと助けに来て下さると思っていました」と奥さんの一言。「助けに！ ここでも男手が必要なのか、俺に何ができるのだろうか？」と思ったが、結局子供たちと一緒にの生活が始まった。四人の子供たちを相手に、知っている限りのおとぎ話などを話して聞かせるなど、子守りの日々が続いた。ここで三十八度線のことを知った。南朝鮮への道は完全に封鎖され、このままここで平壤市民として行動するしか他に

方法はなかった。

平壤市民権を得るため、名前を「村上弘」と変えた。日が経つにつれて市民生活にも慣れて市内を歩き回ったが、日本人学校の校庭は満州から疎開の途中で、敗戦を迎え、行き場のなくなつた難民家族でごつた返していた。ぼろぼろの服を着た老人、これが女性かと思うような男のように髪を刈り上げた婦人。泣くことを忘れた子供たち。関東軍の鉄の傘の下で護られていた平和な生活が一夜にして破られ、国家の犯した罪を一身に受けた、哀れな難民たちが大勢いた。

三 偽りの帰国命令

ある日、日本人の捕虜隊長と称する者が一人で村上家を訪ねてきた。その男の話では「平壤駅構内で使役中の捕虜仲間村上さんの親戚がいて、病気が重く命が危ないので、誰か代わりの人がいれば入れ替わりに逃げられる。要は人数さえ合えば誰でもよいから」とのこと。さらに話が続き、「私の捕虜グループは、兵士ではなく朝鮮各地で

出発した。主人たちの日本送還を知つた家族が、平壤駅に駆けつけてきた。ホームは見送りの家族で混雑していた。家族から手渡されるお金、衣類、食糧を私は羨ましく見つめていた。

十一月四日、平壤駅構内で堤安夫大隊長は「我々市民大隊の千人は、ひと足お先に日本に向かつて帰国致します」と、大声で申告して乗車した。元山港から乗船することと、誰もが日本へ帰れると信じていた。貨車は真つ暗な朝鮮半島をのろのろと横断していた。こんなに簡単に日本へ帰れるのかと思ひながら、疑惑と希望を乗せた貨車は止まっては走り走っては止まりながら、どこかに向かつていた。明るくなると駅の引込線に入り一日中停車し、日が沈むとまたのろのろと動き出す。不思議なことに、途中食糧の配給は全くない。金を持っている者は、停車のたびに寄つて来る朝鮮人物売りから食べ物を買っていた。

兵隊なら部隊ごと捕虜になつていてるので仲間がいるが、不当に捕虜にされた一般市民では、仲

理由なくソ連軍に捕まつた一般市民ばかりで、近く日本へ送還される予定である」とも言った。

この日、私の運命は大きく変わった。日本人捕虜隊長と一緒に平壤駅へ行き、そこで立つのがやつつのような男と入れ替わつた。重病の人と自発的に入れ替わつたとなれば美談にもなるが、近く日本へ送還されるとの言葉に惹かれて替わつたのだつた。市民大隊とはいえ、全員が日本兵の軍服を着ていた。真新しい軍服をもらい、背広を脱ぎ以前の日本兵姿に戻つた。

平壤駅貨物廠の使役とは、日本軍が保管していた食料品をソ連国内に送るための、貨車への積み込み作業であつた。数日後、貨物廠での使役が終わり、日本へ引揚げられるためいったんあの三合理収容所に連れ戻された。

翌日、日本への帰国命令が出た。少ない手荷物の内容検査が何回ともなく繰り返され、そのたびに金目になりそうな品物はソ連兵に取り上げられた。夕方、市民大隊は帰国のため平壤駅に向かい、

間がないばらばらの集団である。

私は相変わらず独りぼつちで、線路に落ちている大豆を一粒一粒拾い集め、飯盒で煮て食べた。同じように落ちている大豆を拾う乞食？仲間がいた。新京工大の教師だつた岡田貞重さんと、同じく学生の北岡清二君の二人だ。三人の乞食仲間は手に入れたわずかな食糧を分け合い、仲良く旅を続けていた。

右手に日本海が見えてきた。貨車はとつくに予定していた乗船港の元山を過ぎていた。乗船港は清津に変わったという。そのころまでは、まだ日本へ帰れることと信じていた。貨車は北上を続けていて、祖国日本はだんだんと遠く離れていた。空からは白く冷たい雪が、我々の行き先を告げるように降ってきた。

敗戦兵、いや乞食の集団に大陸の冬が襲いかかる。いつの間にか清津港も過ぎ、左手に豆満江の流れが見えてきた。豆満江を渡れば満州、その先はシベリアだ。祖国日本への道が断たれたことを

知り、騒ぐ集団を乗せた貨車は、遂に豆満江を渡り、囃門駅に停車した。

全身が凍りつくほど寒くなってきた。囃門駅を出て夜明け前、真つ暗な駅で下車命令がでた。大地が凍っていて吹雪が全身を覆った。誰もここが延吉だとは思わなかった。市民大隊は、延吉六四六捕虜收容所に收容された。

結局は、五十六対空無線隊の仲間を追って、私もシベリア行きとなった。寒い寂しい、そして悲しい。生きて日本へ帰らねばならぬ、「くそ、死ぬものか！」と心に誓った。

四 延吉六四六捕虜收容所

延吉六四六捕虜收容所は室内の中央にストーブがあり、その両側の棚に寝床がある。我々は一枚の毛布にくるまって寝た。朝夕にコンスタートのすいとん汁が支給されたが、腹は減るし寒さは厳しい。毎日暖房用の燃料確保のため、收容所付近のあばら屋解体作業にかり出された。

ある日、市民大隊のみに集合命令がかかり、改

手を差しのべてくれなかった。頼れるものは、自分以外何もないことを知った。

ソ連軍宿舎の塵捨場で、牛の足を見つけ持ち帰った。皮を剥ぎ取り、ガラスの破片で骨に付いている肉らしきものを削り取り、飯盒で皮が柔らかくなるまで煮込み、全部食べてしまった。骨は数個に砕き、中の髓と共に煮てスープを作った。しかし、翌朝には猛烈な下痢を起こした。アメーバ赤痢か。收容所内の医務室に行くが、日本人軍医はただ病状を聞くだけで何も手当はしてくれなかった。

子供のころ祖母から聞かされた消し炭のことを思い出し、大切な薪で消し炭を作り、砕いて飲み込んだ。炭が体内の毒物を吸収して排出してくれることを祈った。数日後、下痢は止まったが体力を大分消耗してしまった。残り少ないお金をはたいて数個の大蒜を手に入れ、毎日少しずつ嚙って体力の回復を図った。

十二月三十一日、大晦日。忌わしい昭和二十年

めて身元調査が行われ、一般市民と以前兵士・警察官であった者が別々にされて、新たに一般市民だけの大隊が編成され、武道館に移された。寒々とした武道館。私たちは床に蓆を敷き、一枚の毛布にくるまって互いに体を寄せ合い暖を取る。寒い。寒い。全身が凍りつくほど寒い。腹は減る。何も考えたくなかった。

朝起きると、隣の男が動かない。冷たい。いつ死んだのかも知らない。毎日数人の仲間が死んでいったが、死者の衣類はたちまちだれかに剥がされる。私もここで死んでいくのか、と覚悟を決めた。

この冬、壕に投げ捨てられた亡骸は数千体とのことだった。この仲間たちは行方不明者として満州の大地に消えたのだった。さらに発疹チフスが風と共に増えてきた。

私は飢えと寒さに震えながら、知っている限りの日本の神様・仏様に救いを求めた。しかし日本の神様・仏様は、遠い異国の地満州までは救いの

は今日で終わる。新しい年はどんな年だろう。と思っていると、夕食前に一般市民大隊のみ集合命令がかかった。大晦日に何事かと、がやがや騒ぎながら整列した。簡単な点呼が終わり、営門を出ることとなった。いつもだと周囲を厳重に見張っているソ連兵の姿が消え、隊伍が乱れてもだれも何とも言わない。我々はかたまり合って駅の方面に移動し、旧省公署前で止まった。先頭にいた通訳から「あなた方は解放されました。自由に行動してください」と、突然解放を知らされた。行き場を失った男たちは広場の廃屋を壊し、焚き火を始めた。辺りはだんだん暗くなってくる。零下三十度、野宿などできるわけがない。男たちは、今夜の宿を探しにばらばらに散って行った。日本人宿舎を見つけては、「お願いです。今夜だけ泊めさせて下さい」と頼み歩いたが、どこでも拒絶された。

何軒目だろうか、やっと玄関の戸が開いた。老夫婦が夕食の最中であつた。お二人の食い扶持を分けて頂く。久しぶりに食事らしい食事。野菜を

噛みしめると、自然と涙があふれ出る。年越しの夜、心暖かい青木老夫婦のお陰で新しい年を生き延びて迎えられる。畳の部屋で、人間らしく温かい布団に潜り込む。明日のことは何も考えずに寝た。

翌昭和二十一年元旦、老夫婦にはこれ以上迷惑はかけられない。早朝、一夜の宿のお礼もそこそこに表に出る。零下三十度。外套もなく夏服のまま一枚の毛布を体に巻いて、凍りついたフルハト川の橋の上で、冷たい光の初日を拝した。私の人生で迎えた一番強烈な元旦の朝である。

昨夜解放された日本人は省公署前に集まれとの伝言が、どこからともなく伝わってきた。省公署前に行く、既に男たちは集まっていた。

壇上に一人の日本人が立ち、どなり始めた。「延吉の日本人会には解放された千人もの日本人を受け入れる余力はなく、万一受け入れられても食糧事情の緊迫から共倒れの危険がある。君たちは、家族の待つ北朝鮮に向かって今から出発してくれ」零下三十度の中を多くの人々は、防寒具も

ちろん十分な食糧もお金も持たずに出発した。

山また山の鮮満国境を越えて、平壤に到着するなど、到底考えられない。この日出発した人々は、行方不明者として満州の大地に消えていった。行き場のない私は、今夜からの宿を求めて日本人街を頼み歩き、やっとのことで女性ばかりの佐々木家に収容された。

五 三山酒造所

延吉二八の丘、私はこの丘で地獄を見た。日本人の墓場、いや死体捨て場である。

満蒙開拓青少年義勇軍の幹部並びに年長者はソ連軍に連れ去られ、残された十四、五歳の少年たちは自分の力で生きてゆかねばならなかった。生きる術を知らない少年たちは、飢えと寒さと疲労のためばたばたと倒れていった。大八車に積まれた裸の死体、ぼろぼろの麻袋に包まれているのはまだ良い方で、ほとんどが真っ裸で木材のように積まれていた。その車を引く子供たちもぼろぼろの衣類、中には麻袋を体に巻き付けただけの子も

いた。倒れた仲間の遺体を埋葬すべく、この二八の丘にやって来たのだが、真冬の満州の大地はかちかちに凍って鉄のように硬くなっていて、日本人の埋葬を拒んでいた。雪の大地に並べられた少年たちの遺体には、雪が掛けられるだけだった。数日後には野犬に食いちぎられ、手足はばらばらにされて、異国の丘で野ざらしになってしまった。

私は頼まれて、生まれたばかりの赤ん坊の亡骸を捨て、この二八の丘へ足を踏み入れた。延吉の街は、日本人にとって暗く悲しい話の多い場所である。しかし、この街にも例外があった。大晦日の夕方、宿を探しているときに、別れ別れになった岡田さんは、中国人農家の納屋に潜り込み、物乞いなどをして生きていたが、その日寒さと空腹による疲労のため、三山酒造所の前で行き倒れとなった。彼の薄汚れた服の上には、冷たい雪が容赦なく降りそそいでいたが、彼は死んだのか動かない。そのとき酒造所から中年の男が出てきた。

男は雪に半ばうずもれた日本人を見付け、駆け寄

って抱き起こした。岡田さんは暖かい事務所に運び込まれ、手厚い看護を受けて生き返った。岡田さんを助けたのは、三山酒造所の社長、金興造氏である。ここ延吉は抗日朝鮮独立運動の発祥地である。金日成の本拠地でもある。日本人に恨みを抱かない朝鮮人など一人もいるはずがないのに、伝染病（発疹チフス）かもしれない薄汚い日本人を抱き起こして助けた朝鮮族金興造氏の厚意を、私たち日本人は忘れてはならない。

乞食のような日本人が新京工大の教師と知った。金社長は、「酒麹菌」について相談をもちかけた。酒造所はソ連軍の満州侵入と同時に操業を停止して、この冬に再開したばかりであったが、肝心の酒麹菌に青かびが発生して、どうしても酒麹が造れず困っていた。岡田さんは菌培養の知識があり、純粋な酒麹菌を作り出せると自信ありげに話した。金社長はこの乞食のような日本人の能力を信じ、酒麹菌の培養を依頼した。

同じ日の朝、私は空き腹を抱え朝鮮市場をふら

ついていた。角の温飯屋の前で、人の良さそうな老人に呼び止められた。呼ばれるままに温飯屋に入ると、奥の部屋のオンドルが壊れ床が大きく剥がされている。レンガを並べ直し、その上に平らな石を乗せ、煙道を作る作業の手伝いを頼まれた。不器用な老人の手先を見ているうちに、作業の要領が呑み込めてきたので、私は老人に代わって手際良く作業を進めた。夕方、オンドルの修理が無事に終わった。店に来客があり、老人と何か話している。「オマエ、チョンサラム、アボジ、ホメル」「メシメシ、トウセヨ、クシクシ」と言つて店のテーブルの上の洗面器のような食器に、白米ご飯が盛られた。白い湯気が揺れている。昨夜はジャガイモ二、三個しか食べていない。何カ月ぶりに口にする白米ご飯。おかずに肉汁とキムチを出されて、私は夢中で食べた。銀しやりの美味しさを心ゆくまで味わった。腹いっぱいというよりも、喉元まで食べてしまい、下を向くのも苦しい。明日も来い、との老人の言葉をあとに温飯屋を出た。

いていた。ご主人は軍人で行方不明となり、官舎は暴民に打ち壊され家財は略奪されて身一つで、金社長に助けられ住み込み女中として働いているとのことで、私たちの食事の面倒をみてくれた。何回ともなく繰り返される酒麹菌の培養。培養器の温度、湿度管理が私の仕事である。だんだんと青かびの量が少なくなり、遂に純粹な酒麹菌の培養に成功した。あとは麹菌を増やすのみ。あるだけの試験管に培養する。蒸し上げられた餅米に麹菌を振りかける。純粹な麹菌を造ることに成功したのだった。

酒造所は急に忙しくなつて、酒造りの職人が呼び集められ、もろみ室の殺菌作業が始まる。蒸された多量の高粱に種麹が混ぜられ、酒造りが始まった。あとは職人の酒造りを見守るばかりとなつた。大きな樽の中でもろみが、ぶつぶつと音をたてて発酵している。蒸留が始まった。はじめにフウゼリ油、次に無水アルコール、独特の香りの高粱酒が流れ出る。

久しぶりに銀しやりを腹いっぱい食べて、ご機嫌な帰り道、三山酒造所の前でばったりと岡田さんと再会した。「おうー、村上、元気か。ちょうどよい、私の助手になつて、酒麹菌の培養を手伝つてくれ！」と言われ、そのまま酒造所の事務所で金社長を紹介され、酒造所近くの金社長宅に案内された。

社長宅の一室を借り、酒麹菌の培養を始めた。顕微鏡、培養器、試験管、アルコールランプ、培養剤ペプトン、寒天など、要求するものはどこからともなく集められてくる。顕微鏡で青かび混じりの酒麹から麹菌のみを試験管で培養するが、どうしても青かびが混じるので、試験管内の青かび混じりの酒麹菌の頭を白金鍊の先で突つき、次の試験管に培養する。

金社長宅の玄関を入ると、右側に十畳の客間があり、左側の六畳のオンドル部屋が私たちの研究室兼居間である。その奥に炊事場と便所があつた。三十歳ぐらいの上品な日本女性が、女中として働

高粱酒ができあがると、酒造所の中庭に新酒のカメが持ち込まれ、豚の丸焼きを着に賑やかな酒盛りが始まった。中国人、朝鮮人に交じつて、二人の日本人が生きている喜びを心から味わった。それから毎朝、カメの高粱酒を一杯グイーと呑み、事務所で雑用などを手伝つていた。

ある日、頼まれるままに酒造所内の配置図を描いた。この図面を描いたばかりに、また別の生きる道が拓かれた。酒造所再開の陰に日本人あり、とのうわさが当局に知れ、二人は保安隊に呼び出され取り調べを受けた。新京工大の教師と学生と名乗り、本物の岡田教師はいずれかに連行され、偽学生の私はその場で釈放された。

六 朝鮮義勇軍龍井兵工廠

しばらく後、岡田さんから「朝鮮義勇軍龍井兵工廠で松根油の研究をしている。北岡と二人で手伝いに来てくれ」という連絡があつた。北岡君は趣味で覚えた写真術が身を助け、中国人写真店に住み込み、助手をしていた。一応断つたが、軍の

トラックが迎えに来て無理やり兵工廠に連行された。兵工廠正面で岡田さんの出迎えを受け、宿舍に案内され金隊長に面接した。大学建築科出の北岡君は松根油の蒸留釜の設計を、私は自動小銃の設計図を描けと命令された。真新しい義勇軍の軍服、それに「朝鮮義勇軍・技術員・同志村上弘」と書いた腕章と身分証明書が支給された。宿舍は兵工廠内の三軒長屋が与えられ、右が北岡君、中央が岡田さん、左が私であった。起床は六時、全員営庭に並び点呼、そのあとは体操であった。食堂は別棟で、部屋の中央に置いてあるかな金かなたらい、盥かんざらいのような容器に小豆混じりの高粱飯が盛られ、白い湯気が揺れている。各自勝手にどんぶりに盛り、もやし汁とキムチをおかず食べる。

隊長を始めとして全員は薄気味の悪いほど親切で、一切の差別待遇はなかった。兵工廠内の床屋は無料で久しぶりにさっぱりと刈ってもらった。たばこも支給されたが、灰皿のしけもくを口にした記憶があるので、充分には支給されなかった。

にも平和が戻っていることを知った。「南方引揚げ便り」を最後に、電波は消えた。満州からの引揚げについては何も言わない。

そのうちに、自動小銃の設計図がやっと完成した。珍しく金隊長が私の前に姿を現して、「ムラカミ、コノケンジュウ、シュウリデキナイカ？」と、私の机の上に壊れた拳銃を山と積んだ。拳銃などいじったこともない私は、旧日本軍の大型拳銃、コルトなどの小型拳銃など種類別に分類してから分解整備を始めた。破損した部品は、他の拳銃の部品と交換して完全な拳銃を組み立てた。いろいろな弾が木箱にいっぱい入っている。弾を選び出し装填、あとは試射するだけになり、営庭の立ち木に厚板を立てて、三メートルほどの位置から発射したが、思っていた以上の大きい発射音で、弾は厚板を打ち抜いて木に食い込んだ。日本軍時代でもめったに撃ったことがない拳銃を、敗戦後こんなに自由に撃てるなんて考えてもみなかった。毎日五、六丁完成させては試射するので、射撃の

ではなかったかと思う。

朝食が済むと、北岡君と私は設計室に入り、命ぜられた蒸煮釜と自動小銃の図面を描き始める。自動小銃の分解スケッチから私の仕事は始まる。設計室には四人分の製図板が配置されているが、北岡君と私の二人だけなので気楽なもの。日本の歌など口ずさみながら、のんびりと進めていた。金隊長室は二階でめったに降りてこないし、岡田さんは別棟の工場で松根油の研究をしている。兵工廠の中庭の隅に無線室があり、懐かしいトトツ―音が聞こえてくる。無線通信が分かることだけは隠さねばならないと思った。無線室の奥の隅に壊れたラジオが山積みされていたので、比較的程度の良いものを部屋に持ち帰り、点検修理し、他のラジオの真空管と取り替えているうちに音が聞こえてきた。夜になると日本からの電波が届き、日本語の放送が聞こえてきた。

エノケンの「人生とんぼかえり」をはじめ落語、歌謡曲など、懐かしい日本の声が聞こえた。日本

腕もだんだんと上がってきた。護身用にと、小型のコルトを持ち歩いたのもこのころである。

七 日本人引揚げ開始

昭和二十一年七月一日、ソ連軍が引揚げ、後を受け継いだ八路軍と、米軍の援助で近代化された国府軍との戦闘が激しくなってきた。初夏と共に猛烈な攻勢にでた国府軍に圧迫された八路軍は、新京、吉林から撤退し、前線は老爺嶺の線となった。多くの負傷兵が延吉に護送されて、延吉が戦場になる日が近いことは、もはや確実と思われた。兵工廠は朝鮮に避難するらしく、金隊長から正式に話があった。岡田さんは軍と行動を共にするという。北岡君と私は命ぜられた作業が完了したので、延吉残留を申し出て許可された。軍服を返し元の満人服に着替え、義勇軍を去った。

北岡君は元の中国人写真店に再就職し、私は三山酒造所に顔を出すと、金社長が快く迎えて酒造所内の社宅を提供してくれた。また、保安隊に食料品を納めている「吉東泰」を紹介してくれた。

吉東泰の高店長の代理として毎朝、朝鮮市場でモヤシ、タマネギ、ジャガイモ、豚肉などを購入、保安隊炊事場までリヤカーで搬入し、昼食をご馳走になり、夕食分を飯盒に入れて帰った。そのうえにまともな給料ももらえた。

昭和二十一年八月十五日。戦勝記念日で、延吉の街中が祝賀パレードで賑わっていた。街角の広場では、日本兵がソ連兵、中国兵に痛めつけられている寸劇をやっていた。私は、自分の部屋で一人泣きながら高粱酒を飲んでた。

満州から日本人の引揚げが開始されたらしい。国府軍、中共軍間では、米軍の仲介により「戦争中断」協定が成立した。

国府軍側の新京まで行けば、日本政府の救いの手が伸びているとのことで、新京までの旅費は自分持ちとのこと。

延吉日本人会で引揚者名簿の作成が始まった。金額は忘れたが手持ちの金を日本人会に納め、「日僑・村上弘」という名札をもらい胸に縫いつ

ける。日本へ帰れるとの希望があるので、河原でのこの寝も苦にならない。

翌朝、食事が済んだグループから出発。昼過ぎ、見通しのきくゆるやかな坂道に出た。その道の両側には国府軍の兵士が並んでいる。

その服装は米軍の援助なのか、中共軍兵士と異なり立派である。やっと登りつめた所に線路があり、ここがどうやら老爺嶺のようだ。無蓋貨車が先着した仲間を満載して、今にも発車しそうに煙を吐いていた。列の最後が到着するのに大分時間がかかったが、どうやら全員無事貨車に乗り込んだようだ。何の合図もなしに、貨車は乱暴に動き出した。

山から離れるに従って、吉林平野から、きらきら輝く大河が見えてきた。松花江だ。貨車は流れのふちで止まった。ここから松花江の流れに沿って歩き、破壊された鉄橋近くの船着場から中国人船頭が操るいかだに乗って松花江を渡り、吉林市街に入った。

ける。

金のある人、無い人、帰れる人、帰れない人、親の無い子供たち、帰国を諦めた人、喜びの顔、悲痛な顔、様々な人が町中を歩き回っていた。

八月二十日、延吉駅に貨車が入り、乗車割当が指示され私は有蓋貨車の中に座った。今度こそ本当に日本へ帰れると思うと、嬉しさが涙とともに込み上げてくる。三山酒造所の金社長からの餞別と、わずかな食糧を手に、思い出の数々を残して貨車は延吉駅をあとに動き出した。

三日目の夕方、蚊河で下車。広々とした倉庫のような建物に収容され、一泊した。

翌早朝、歩いて出発。行き先が分からぬまま先頭の人に続いて山道を老人、女性、子供の長い長い列ができた。幼い子供たちも自分の力で歩かねばならない。私は最後尾でこぼれ落ちそうな幼子を背負い、ただ黙々と歩いていた。夕方近く小さな流れに突き当たると、先着の人々は、野宿の準備をしていた。

翌日、吉林収容所を出発、新京に向かった。新京は北岡君のいた大学の街である。満鉄宿舍の知人を訪ね食事をご馳走になり、古枕木をもらい鉋で割り薪を作って売り、お金を稼いだ。

その後、奉天（瀋陽）収容所に入る。あとから、あとから引揚げ列車は到着。収容所は日本人であふれていた。

やつと、錦州収容所にたどり着き、ここで葫蘆島への順番待ちをした。既に一カ月も滞在している団体もいた。収容所の周囲は中国人が店をかまへ、万頭、お汁粉、餅など何でも売っている。葫蘆島へ一団が出て行くと、すぐあとからまた新しい一団がやってきた。そうしているうちに、とうとう私たちの順番がきた。葫蘆島に向かう心も足どりも軽い。地上から消えたはずの、日の丸の旗をなびかせた希望の船が目の前にあり、嬉しさが心の底から込み上げた。

最後の荷物検査が終わり、頭から白い粉をかけられて一歩、一歩踏みしめて棧橋をのぼる。船は

静かに岸壁を離れた。生きて帰れる喜びが涙と共にあふれてきて、遠く離れていく大陸に向かって「満州のバカヤロー」「満州のバカヤロー」と、何度も何度も叫んだ。

八 一人で帰国「山崎」にもどる

緑鮮やかな祖国日本。佐世保の山々が見えてきた。「日本だ!」「日本の山が見える!」何度も何度も夢に見た祖国の山々が、今日の前に見える。その美しさを眺め「帰れた。帰ってきたのだ!」と思うと、自然に涙が込み上げてくる。

船内に下痢患者がためたため上陸できずに、港内で四日ほど停泊した。患者の病状検査の結果、五日目にやっと上陸許可が下りた。日本の土を一步一歩踏みしめながら宿舎に入った。

まず、最初の仕事は偽名村上弘を、本名山崎辦に替える手続きだった。「元日本兵は名乗り出なさい。米軍の事情聴取がありますから」と叫んでいたが、誰も名乗り出ない。翌日また係官が来て「戦争は終わりました。大陸の兵隊さんがどのよ

うな経路で帰国できたか、ただ聞くだけです。復員兵士には、その階級に応じ今日までの手当が支給されます。名乗り出てください」と言っていたが五、六人が名乗り出たようだった。手許にお金が一銭もないので、手当を目的に私も名乗り出た。そこで初めて、かつての敵米兵を見た。事情聴取は終戦時の所属部隊名と場所、当時の階級と勤務内容、佐世保復員までの経路・経緯などを聴かれた。思ったより簡単に終わり、手当三百円、東京までの乗車券・食券が支給された。

宿舎の壁には各地の被害状況を知らせる伝言板があり、東京麻布龍土町の状況も記されていた。歩兵第一連隊と第三連隊にはさまれた兵隊の町、麻布龍土町は当然焼け野原とのことだが、我が家の様子は何も分からない。

南風崎駅から東京行き引揚列車に乗るが、三年ぶりに見る車窓の風景は昔と変わらない。緑美しい山々「国敗れて、山河あり」まさにその通りである。

品川駅に到着し、飛び降りた。見覚えのある六本木交差点を曲がり、我が家の焼け跡に帰り着く。通りがかりの人に家族のことを訪ねると、材木町に移転したとのことで行く。見知らぬ家の玄関を開けると、狭い部屋に寝転んでいた弟たち、おやじもおふくろも元気でいた。

麻布区役所で帰国の手続きを済ませ、村上弘から本名の山崎辦に戻った。市ヶ谷の復員局、渋谷の復員局と、手続き業務を済ませた。

私の所属した平壤の隼五十六対空無線隊は、三合里収容所を出て興南港からウラジオストク経由、シベリア・ソフガワニ収容所に連行され、森林伐採、湾口整備などにこき使われて、私より遅れること一年、病死の青木茂兵長一人をシベリアの土に残し、舞鶴港に復員した。

九 再び満州へ

引揚げしてから十七年目に、思ってもいなかった満州へ足を踏み入れることができた。中華人民共和国と日本はまだ国交が開かれていなかったが、

高崎達之助と廖承志の間で結ばれたLTラインを通して、日中製紙技術交流会の話が舞い込んできた。

昭和三十八年九月十二日、羽田から香港へ飛び、指定された金門飯店に宿泊して待つこと三日、中国旅行社に招聘状が届き、列車で国境の深圳駅に行き、そこから香港側の税関を出て十メートルほどの小さな橋を渡ると、そこが赤い国、中国である。製紙技術交流で招かれた私たちは中国税関の検査もなく、ほとんどフリーパスだった。貴賓室に通され、中国工作員が一切の入国手続きなどの世話をやいてくれた。汽車で広州へ向かい、広州の羊城賓館に一泊して、翌朝中国航空で南京経由で北京に入った。

北京での製紙技術交流が終わり、上海、杭州を回って再び北京に帰ると、ちょうど中華民国成立十四周年の国慶節を前にして、北京の街は沸き返っていた。

九月三十日早朝、周恩来首相から国慶節招待状

が届き、人民大会堂における前夜祭に出席したが、この宴会場は五千余人を収容できるとかで髪の色、皮膚の色がちがう各国の招待客が来ていたが、アフリカ人、北ベトナム人のほか、日本人は我々だけであった。料理は超一流の中華料理、酒は貴州の銘酒茅台酒^{マオタイ}、五千人の食事風景は想像を絶するものだった。毛沢東主席、周恩来首相、劉少奇国家主席、朱徳元帥、廖承志中日友好協会会長など居並ぶメインテーブルは、なかなか壮観である。周恩来首相は、茅台酒を手に各テーブルを回り乾杯して歩く。

十月一日国慶節当日、天安門の雛壇に招待され、次から次へと繰り広げられるパレードを一日中眺めていた。

翌日、旧満州の錦州にある金城製紙に招待された。最初に驚いたのは北京発モスクワ行き国際急行列車を、駅のない金城製紙工場の前で臨時停車させ、我々を降ろしてくれたことである。金城製紙は戦前の旧王子製紙系、錦州パルプ工場である。

内され、やっと質問から開放された。

ここ錦州は、私が満州延吉から引揚げ時の最終集結地です。その夜の月は、十数年前、この地で見た月と少しも変わってはいなかった。この大地、この風、異国の地に残されて土となった人々の悲痛な叫び声が、今でも何処からともなく聞こえてくるようである。思い出の地、延吉行きを申し出たが、治安不良との理由で断られた。平成元年、あれから四十余年。長い歳月はつらく苦しいことなど忘れ去り、わずかな明るい出来事のみ脳裏に残した。その後、北岡君は電力会社の建設部長、私は機械メーカーの技術部長を最後に現役を退いた。

私は生き抜いてきた思い出の地、延吉行きを計画、延吉残留日本婦人、宮部寿美子さんと連絡を取り、三山酒造所の調査を依頼した。

中国を吹き荒れた文化大革命の嵐は、あんなへんぴな街延吉にも吹き荒れた。三山酒造所は醤油工場に変わり、恩人金興造氏は「背国人」として

我々は、社宅の前を通って工場に向かったが、社宅はその昔日本人のものであったらしく、日本風の建物であった。社宅の前では、現在住んでいる中国人が並んで出迎えてくれた。「ニホンジンダ」

「ニホンジンダ、マタカエツテキタ」と、驚きと脅威の顔が並んでいたが、すぐ懐かしそうな笑顔に変わり、「オウシセイシノカタデスカ」「タカハシサン、オゲンキデスカ」などと声をかけられた。

工場の応接室に通され、製紙技術交流会議が始まった。「偉大なる党の指導の下に、我々エンジニア同が心を込めて製作した抄紙機を是非見て下さい」と自慢げに話を進める。彼らにとっては最新鋭抄紙機だが、私にとっては十年前の旧式マシンである。「私は中国語が分かりません。しかし、あなた方が造られた抄紙機とは話すことができます」と、私が初めて抄紙機を設計製作した当時の失敗談を話すと、次から次へと質問の嵐。交流会が終わわり、夕食の宴会場でも質問を受ける。王子製紙時代に利用されていた会社寮らしき宿舎に案

消され、その後の消息は一切不明とのこと。また、延吉の街の様子も大きく変わり、昔の面影が残っているのはフルハト河にかかる延吉大橋のみ、とのことであった。

恩人の消えた街、延吉

昔の面影の消えた街、延吉

旅行目的が無くなった街、延吉

わずかな明るい思い出が消え

残るはつらく悲しい思い出ばかり

東京、北京、新京、延吉への道はあまりにも遠く、私の延吉行き計画は夢と消えた。